せめて、好きだけは。

フェルデルト

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

後悔なんてものではすまされない。

朽葉禍月の歪んだ純愛の物語。

目次

第1話 …… 1
第2話 …… 3
第3話 …… 6
第4話 …… 9
第5話 …… 12
第6話 …… 15
第7話 …… 17
第8話 …… 19
第9話 …… 21
第（1）0話 …… 24

第1話

何度も何度も繰り返し同じ夢を見る。
目を閉じれば、瞼にこびりついたそれが僕を苦しめる。目に焼き付いたそれが、僕を闇に連れていく。堕ちたらきっと、心地がいいかな。だって僕には何も無い。
虚無という言葉すらも僕を表すには言葉足らずだ。そこには無がある。言い換えればｚｅｒｏだ。一方の僕はｎｕｌｌというべきだ。真の空白。
目の前で生きる理由を、僕を救ってくれた恩人を、心から愛していた女の子を失った僕なんて、その程度のものだ。
香澄（かすみ）由菜（ゆな）は死んだんだ。
あの太陽のような笑顔と、月のような優しさに触れることはもうできない。目の前で奪われた。
あの、白と血の赤の車に。
酒に酔い潰れた女の車が由菜を僕から奪った。僕に生きる理由と光をくれた由菜を奪った。
奪われた。由菜を、由菜を・・・
「うわぁぁぁぁぁ!!!!!」
その日からだ。
同じ夢を見るようになったのは。由菜が奪われた瞬間を何度も見るようになったのは。

嫌な汗がこびりついたシャツを脱ぎ捨て、別のシャツに着替える。普通なら、これを大体朝の6時くらいにやるだろう。だが今は１０時を回っている。あの日から僕は学校に行ってない。由菜がいない学校なんて、行く価値はない。受験生がなんだ、由菜がいないなら勉強

なんて意味がない…
「ははっ… 由菜ありきか、僕は…」
わかってる。僕は由菜に依存してたんだと。
依存してないと生きていけないほどに。
「由菜… 由菜…」
鏡にうつる僕の目に光はない。
空虚な空間に手を伸ばしてるただの世捨て人が未練がましくもういない彼女の名を連呼しているだけだ。いや、彼女と言えるほどの関係はなかった。
誰にも由菜は優しかった。
万人に差別なく、等しく優しさを分け与えていた。差別慣れした僕にはそれが新鮮だった。
初めて由菜に会ったのは中学二年生の頃だ。
中一の頃、僕はいじめに遭った。
小学校から上がって、別の学校の連中も一緒になって、環境に馴染めない奴を迫害する。対象は僕だった。
学校に行かないことでそれを回避して4月、いじめてた奴らは別のクラスに流れ、僕はなんとか学校に復帰できた。一番前の席だったんだけど、右隣の席にいたのが由菜だった。
「私は香澄 由菜。一年間よろしくね。」
「… 朽葉(くちは) 禍月(かづき)。一応、よろしく…」
この出会いが無かったら、きっと今の苦しみはないだろう。でも、きっと生きてもいない。
結局、由菜に出会おうが出会うまいが、絶望に囚われるのには変わりがなかった。
それでも、と僕は思う。
せめて、好きだと由菜に言えたのなら、と。

第2話

僕は由菜に、気づいたら惹かれていた。
いつからだったろうか、もうわからない。
出会ったばかりの４月頃はケンカもした。
テスト終わった６月頃は勉強教えてと言われた。
体育祭のある９月頃には一緒に練習もした。
僕の誕生日の１１月にはプレゼントをもらった。
由菜の誕生日の１２月にはプレゼントをあげた。
まだまだ、由菜との思い出はたくさんある。
でも、それもたかが５年分だ。
たった５年。２０００日にも満たない。
だがそれすら一日ないし一瞬で追加されなくなってしまった。
あの瞬間のあの惨状が最期の思い出にして、最強、最凶の思い出。
「僕が・・・ 気づけていたら・・・」
後悔なんてものではすまされない。
そんなことをしていたら、きっと、きっと僕は僕でなくなる。
それはできない。
「ごめん、禍月・・・ 生きてね・・・」
由菜の遺言。僕だけが聞いた、唯一、僕だけが由菜からもらったもの。
由菜の死の間際の一言で、僕は死ぬことを選べなくなった。他の誰でもない由菜の願いだ、無下にはできない。できるわけない。
だから、生きてる。
―嬉しいな、覚えててくれたんだね―
はっとする。何か声が聞こえた。
その声を、僕は間違えることはない。
「由菜・・・？」
幻聴。そう、幻聴。
「幻聴なのか・・・？違う、今のは由菜の声だ・・・ 生きているの・・・？
由菜！返事をしてくれ！」

僕しかいない自分の部屋で僕は叫ぶ。
由菜は僕の家を知らない。だから普通に考えて、由菜が生きていたとしてもここに由菜がいるのはおかしい。頭で分かっていても感情はどうしようもない。
そして、ついぞ声は聞こえなくなった。
「そうだよな…だって僕は君の葬式に行ってない…認めたくなかった…由菜が…君が死んだなんて！目の前で見たからわかってるけど！それでも！…それに言われるのが怖かった。一番近くにいたのに庇うことも助けることもできなかった無能だと！なんで由菜を助けてくれなかったのと！言われるのが怖かった！言われたら…僕は…死んでも詫びることなんて出来やしない……！」
涙があふれて止まらない。
嗚咽がただただこだまする。
―気にしすぎだよ。禍月は何も悪くない。―
また声が聞こえた。
今度は前よりはっきりと。
「由菜…やっぱり、由菜なんだね…」
―うん、香澄由菜だよ。―
もっとはっきり聞こえた。由菜は、生きてる。生きて、る…？目の前で死んだのに…？
「ねぇ、由菜…今どこ…？」
その答えは、しばらくは帰ってこなかった。
帰ってきた答えは、もっと衝撃だった。
「それはね、禍月の脳の中。禍月の記憶から、私の人格が禍月の中に作られたの。」
僕の声で、僕の口から由菜の所在を明かされる。
人間の脳は、苦痛に耐えるために新たな人格を作ることがある。けど今回はそれが記憶を依り代に作られた組成からして不完全な人格。だから僕の人格が残ってるまま、僕の知る『香澄由菜』が現れた。
―でもまさか人格作っちゃうほどショック受けてるなんて思わなかったよ。ごめんね、ほんとに…死んじゃって…―

「いいよ、由菜…　こんな形でももう一回話せたんだ…　僕はそれでいい…」

奇妙奇天烈な再会。

でも僕は、また生きようと思えた。

第3話

太陽が天球の頂上に達する時間。
うだるような暑さが室内を支配する。
扇風機が送る風すら生ぬるい。
だから、どうした。
今、僕は生きていようと思っている。由菜が僕の中にいる。面と向かって話すことはできないし、由菜の動きを見ることもできないけれど、それでも僕は2時間前の僕よりも世界と関わることができている。
ふと僕は由菜が脳内にいるということはどういうことか気になった。視界や思考は共有されているのか、意識は独立しているのかなどだ。
「由菜、ちょっといい？」
―ん、どったの禍月。―
由菜の返事を確認して、僕はチョキを作った右手を見る。
「由菜、僕の右手の伸びてる指の本数は？」
―二本だね。―
「おっけー、じゃあ・・・」
次は頭の中にうさぎを思い浮かべる。
「今僕が思い浮かべてる動物はわかる？」
―それはわかんないなぁ、猫？―
わかんないのか。てことは視界は共有してるけど思考はそうではない。
「もひとつ質問いいかな。由菜の両親の名前はわかる？」
―君のような感のいいガキは嫌いだよ―
いやいや、確かにそんな返しがくるような聞き方はしたけれども。
―残念ながら、今の私は禍月の脳内にいる不安定な人格だからね、禍月の知ることしか私は知らないよ。だから忘れたこともあるし、新しくわかったこともある。でも、禍月は私のこと、すっごく大事に想ってくれてたんだね。―

言葉が出なかった。そうだ、僕は由菜が大事だ。僕の命よりも大事だ。あの地獄のどん底からすくい上げてくれて、僕に光をくれた由菜。

「そうだよ・・・ 由菜を大事にできないわけが無い・・・ 救い出してくれた恩人をないがしろにできるわけないじゃないか。」

―私は特に何もしてないよ。―

はっとする。いつもそうだ。僕は由菜のことを恩人とも思うし大好きだとも思う。けれども由菜は僕を助けてくれたことを僕が勝手に助かったと解釈している。ただ普通に振る舞ったら救われたと崇められる。

普通なら、狂信ともとれる行動だ。

それを僕は自分で気づいてしまったから、由菜と会話するのが少し怖かったことがある。嫌われるのではないかと。下手を打てば僕は由菜に否定されてもう2度と立ち上がることはできないと。

「そう、だったね・・・」

だから由菜が何もしてないと言うなら、それは本当に〝何もしていない〟のだ。

―禍月はさ、きっといろいろ抱え込みすぎなんだよ。って、今の私に言われるってことは自覚あるね？―

「抱え込みすぎか・・・」

―そ。投げ出しちゃえとは言わないけど、でももう少し楽になれると思うよ。―

楽、か。

―禍月の記憶をふわっと見返してみたんだけどさ、やっぱり頑張りすぎだって。誰にも助けてって言わないし。全部一人で抱え込んで、押さえて凝縮させて余裕を無理やり作ってる。まるでブラックホールみたいにいずれ全部押しつぶしちゃいそう。―

僕は何も言わない。由菜の言ってることは、僕がずっと目を逸らしてきた事実だからだ。

―そっか。私は禍月の心が壊れる前に禍月を元通りにするために作られた人格なのかもね。―

「僕を、元通りにするため…」

それが僕の中の由菜の使命なら、僕は一生この苦しい重荷を、闇を抱えて生きればある種由菜と添い遂げられると思った。

思ってしまった。

第４話

長い一日だった気がする。
いつもの夢を見て、うなされて。
いつものように、死にたくても死ねなくて。
太陽が昇って明るくなり、暗くなって月が昇る。
由菜を失ってから色も意味も無くなった回数だけが重なっていくだけの無限ループ。
永遠に続くと覚悟していたそれは、やっぱり香澄由菜という存在が全部壊してくれた。
夜、布団に入る時に僕は思った。
生きててよかったと。
―いや、随分大袈裟だね・・・―
「大袈裟なものか。意味もないこんな命、とっくに投げ出しってたってておかしくなかったんだ。それでも、由菜の言った通りに生きてきた。それが報われたら、意味があったって思えたら、それはとても嬉しいよ。」
布団に寝っ転がり、傘型の電灯の中のランドルト環の形をした蛍光灯の隙間を眺めて僕は言う。
―禍月は、さ・・・ そんな視点だけど、やっぱり息苦しくない？生きづらそうとは思ってたけど、ここまでくると生きるのが嫌ってレベルだよね。―
「そうだよ、由菜。僕は生きてるのが嫌だ。早く死にたい。いなくなりたい。誰にも必要とされず、されたとしても誹謗中傷の的だ。命を誰かにあげることができるなら、僕は喜んで由菜に・・・」
「やめて！」
由菜が僕の身体を使って制止する。
窓から射し込む月明かりは僕の身体の半身を照らし、入ってくる微かな風がレースカーテンを揺らして影を踊らせる。
―やめてよ、禍月・・・ そうやって卑下し続けたら、また自分を追い込んじゃうだけだよ・・・ ―

その通りだと思う。けど、他人に当たるよりかはいい。他者に対して力をひけらかして服従させたり、暴言の限りを尽くして傷をいくつも作り出すような愚行をするよりかは、断然自分を痛めつけた方がいい。

「他人を傷つけるよりかは、よっぽどマシさ。」

—・・・ 優しすぎるね、禍月は。—

優しい、か。

「優しさってなんだろうね、由菜。」

—わかんないよ、そんなの・・・ —

由菜の声音は少し重かった。

言いたいことを隠して、ニュアンスだけを言葉に乗せて重くする。コミュニケーションの技術だ。

だけど由菜の言いたいことはわからない。

聞くのは・・・ きっと怒られる。

だから何も言葉が流れない無の時間が生まれた。

—ねぇ禍月。学校、行かないの？—

そんな時間を耐えられる由菜ではない。

そして、藪から棒に出されたその問に耐えられる僕でもなかった。

「行かない・・・ 行けないよ。それに今の僕が行ったら、死んだ友人の幻覚を見ているただのヤバい奴扱いが目に見えている。」

—私と会話しなきゃいいじゃん。—

「由菜なしで生きれると思うかい？この僕が。」

我ながらこの返しは酷いものだとは思うけれど、もう学校というものに価値を見いだせない僕は割となりふり構ってないのだなと思う。

—この3ヶ月ちゃんと生きてたのによく言うよ・・・ —

だけど、由菜の方が上手だった。

「うっ・・・」

—まぁでも、行きたくないのはわかるかな。禍月の記憶によると・・・結構禍月的に相性悪いウェイ系が多いクラスだし・・・ —

そう、僕のクラスはお調子者が多い。

つまりはノリがいいのだけど、それは同調圧力が強いということも

意味している。それは一人を好む僕には苦痛以外の何者でもない。
「だから、行かないでいいんだよ。僕はもう、これでいいと決めたんだ。」
逃げと言われたっていい。逃げる前に取り返しがつかなくなるよりかは断然いい。
―そういうとこは、譲らないよね。―
「あぁ、譲れない。」
クスッと笑った後大きなあくびが出た。
そうか、眠いのか僕は。
「じゃあ、おやすみ由菜。」
―おやすみ、禍月。いい夢見てね。―
夢、か。もうきっと、あんな夢は見ないと信じて僕はようやくゆったりとした眠りについた。

第5話

また夢を見た。
由菜が死んでいる夢だ。
でも、車に轢かれていない。
どういうことだ。僕の手のひらも赤い。
由菜には触っていないのに。
「うわぁぁぁぁ!!!」

―――――――――――――――

―どったの禍月・・・ また夢・・・ ?―
「そうみたいだ・・・」
でもいつもと違う。車じゃない。
あの赤い手は何だったんだ、僕が由菜を・・・ ?
「っ・・・ 考えてもしょうがない・・・ まずは何か食べないと・・・」
時刻は朝の八時。いつもより起きるのが2時間早い。一日三食食べないといけないパターンだと思って部屋の隅にあるいつもの非常食っぽいレンチンするタイプのご飯を取ろうとして・・・ ダンボールの中身が空であることに気づく。
「あ、無くなった・・・」
―ご飯?部屋から出たらいいじゃん。―
「それもそうか・・・ ここから出るのは前にご飯が切れた時以来だね・・・ やれやれ、行こうか・・・」
久しぶりに部屋から出て業務用スーパーに食料補給に向かおうとする。親はいない。
―禍月・・・ 外出るなら着替えようよ・・・ ―

―――――――――――――――

気を取り直して外に出る。

「眩しい・・・ 暑い・・・ やだね、夏って・・・」
―いや、もう私は暑さを感じないからね・・・ そんなこと言われても、だよ。―
「それもそうか・・・」
財布の場所を確認しながら台車とともに業務用スーパーへと足を向ける。
思考は今日見た夢で埋め尽くされている。
どうして由菜の死因が変わったのか。
どうして僕の手が赤かったのか。
どうして、夢の内容が変わったのか。
―禍月、右に曲がって。―
「え?・あ、うん・・・」
由菜の指示が無かったら通りすぎていた。
いくらなんでも考えることに没頭しすぎたね。
ともあれ業務用スーパーが見えてきた。
―禍月、人が来たよ。―
「人なんて、スーパーなんだからいるでしょ・・・」
と思ったが由菜が言ってるのは僕の方に目的をもってやってきた人のことだ。
「朽葉禍月君ですね。」
「・・・ 誰ですか。」
見たまま警察官の大人が僕に話しかけた。
僕は何も悪いことはやっていないのに。
「黒川冬弥巡査です。香澄由菜さん殺害事件についての任意同行をお願いします。」
頭を殴られたような衝撃。
由菜は・・・ 殺された・・・ ?
「由菜は・・・ 事故じゃなかったんですか・・・」
「詳しいことは署でお話します。」
一考する。
「わかりました。ただ・・・ ご飯をくださいませんか?買い出しに来て

いたところなので・・・」
「それは申し訳ないタイミングでした。上に計らっておきます。それでは、どうぞこちらに。」
黒と白の車体の上に赤のパトライトが映える警察車両。まさか乗ることになろうとはね・・・

気がついたら家にいた。
何が起こったかわからない。
僕は任意同行をしていたはずなのに。
そして目の前にはハンバーガーがある。
自作感満載だ。パンはあったんだとも思う。
同時に腹の虫も鳴る。
「よくわかんないけど、とりあえずこれ食べよう・・・ いただきます。」
「ダメ!」
え、と思う間も無く、僕が掴んだそのハンバーガーは僕の意に反してゴミ箱に放り投げられる。
「由菜・・・ !?食べ物を粗末にしちゃダメだよ!」
—禍月・・・ ごめん、それは食べ物じゃない・・・ —
ますますわけがわからない。
「じゃあ、パンはあるみたいだからそれを食べることにするよ・・・」
由菜の動揺の理由がわからない。
だが僕はそこで気づいた。時計が朝の八時を示していることに。
「あれ、時計・・・ おかしいな、止まった?」
いや、秒針は動いてる。どういうことだ?
—禍月は、ね。丸一日、意識が無かったの。—

第6話

「丸一日…」

僕はそんな長い時間意識がなかったのか。

でも、由菜はそれを知っている… つまりは僕の意識と分離はしているのか…

—そうだよ。禍月は、丸一日。—

だが由菜の言いぐさが妙だ。何故僕はの”は”を強調するのか。

由菜は… 何か知っている…

「ねぇ、由菜。君は… 僕の意識がないその丸一日の行動を覚えているのかい?」

—そうだね… 朧げに、でも鮮明に覚えてる。—

どっちだよとも思ったけど僕のあずかり知らぬところで由菜は僕の行動を覚えている。そっちのほうが重要だ。

—でも、話したくない。—

「なんでさ… どうして… !?」

—それはね、禍月のためだよ。私は知らないけれど、私に会う前の禍月も、気づいたら一日経ってたなんてことあったでしょ?—

そんなことあっただろうか。僕の記憶は五年前初めて由菜に会ったあの時からの記憶がほとんどだ。それ以前の記憶なんて… いじめられていた頃の思い出したくもないものばかり… でも、そういえばある時からぱったり無くなったような…

「そんなの覚えてないよ。思い出したくもない。由菜は僕の記憶を見ることはできるんだろう?ごめん、自分で探してくれないかな…」

—… じゃあ、なおさら教えられないよ。—

由菜が言いたいことは多分、自分と向き合えってことだと思う。確かに僕はそれが出来てない。

それに、自分で自分を見たら、きっとそれだけで嫌気がさす。なんでこんなのがのうのうと生きているんだと。なんで由菜は生きてないんだと。

「そっか… わかったよ由菜。」

―ならよし。そうだ、気分転換にテレビでも見ようよ。まだ朝のニュースの時間のはず。―

「ニュースなんて・・・ 久々だな・・・」

実際はテレビをつけるのも久しぶりなんだけど、そこは何も言わないで通す。

テレビのリモコンを握り、電源ボタンを押すと、少しの時間差の後に黒い液晶画面に色がつく。

色のついた画面の向こうで、アナウンサーと思われる女性がニュースを読み上げた。

『続いてのニュースです。昨日の早朝に起きたパトカー事故の原因は、同乗者が人為的に起こしたものではないかという新たな考えが浮上したことが、捜査関係者への取材で明らかになりました。』

次の瞬間には事故で壊れたパトカーの映像と、その事故で亡くなった警察官の写真と名前。僕はその人に見覚えがあった。

「黒川冬弥巡査・・・ あれ、この人って・・・」

そう思った時にはテレビが消えていた。

意識も遠のいていった。

最後に聞こえたのはこの声だ。

『余計なことすんじゃねぇよ、死に損ないの不完全な三人目のくせによぉ！』

その言葉の意味は、さっぱりわかんなかった。

第7話

「ったく…　禍月の中に出来た新しい人格だかなんだか知らねぇけどなぁ、真実をひけらかすのはちょいとどうかと思うぜ？」
　やれやれだぜ全く。まさか禍月だけじゃなくこの女までお守りしないといけないとはな。
―…　っ!?誰、あなたは…　？―
「人に名を尋ねるのは名乗ってからだぜ、香澄由菜。まさか俺だけで飽き足らずお前まで人格形成しちまうんだからなぁ。つくづく禍月には驚かされるぜおい。」
―人格…　あなたも禍月の中の？―
「さしずめそういうこった…　朽葉禍月の第二人格、朽葉造禍とは俺のことだ。」
―…　ねぇ、造禍さん。なんでニュースが余計なことなんですか…？―
「あぁ…　あのポリ公を殺ったのは俺だからな。それによぉ、知らないほうがいい事ってのがあるんだぜ世の中にはなぁ。例えばそうだな…　俺が禍月の両親を消したこととかか？」
―それ、どういう…　禍月は両親は長期出張って言っていたけど、消した…　？―
　ニタァ…　おっといけねぇ、口角が上がっちまう。
「いいねぇその動揺。得体のしれない恐怖、理解できるけど理解できない言葉…　いい反応するなぁ…　死んじまってるのがもったいないぜ…　いいぜ教えてやるよ。朽葉禍月の両親は俺が殺した。でも遺体は存在しない。何故かって？食ったからだよ。俺が丹精込めて人肉と思われないように食肉と混ぜたり味付け工夫したりな…　さすがに臓物はまずいから一回洗ってミキサーにかけて潰して生ゴミ行きだがな。あと骨はどうにかして砕いて細かくしてちりとりで集めてポイだ。人体っていうのは廃棄率が高いなぁ、ほんと。」
―うっぷ…　なん、ですか。なんなん、ですかあなたは。あなたは本当に人間なんですか!?あの巡査さんを殺して、解体して調理して…

人のやることじゃない！―
「だったら肉や魚も食うんじゃねぇ。生きるって事は奪う事なんだよ。自分以外の命を奪わねぇと生きてけねぇんだよ！」
―それでも・・・ そこまでしなくても・・・ ―
「はっ、そこまでする必要があるから俺がいるんだよ。なんであの禍月の中に俺のようなゲテモノが悠々自適に暮らしてると思う？考えたら割と単純だぜ。」
　香澄由菜の反応はない。ダウンしたか腰抜け。
「禍月は学校でのいじめが始まる前から、虐待を受けていたんだよ。そしてその恐怖を、痛みを苦しみを、二倍にして返す為に、いや違うな。」
「禍月が壊れないように、禍月が俺を作ったんだよ。脳みそのよく分からん機能でな。だから禍月の記憶はところどころ整合性が取れてねぇんだよ。」
「わかったか香澄由菜。知らないほうがよかったのになぁ・・・ 好奇心は麻薬だぞ。知ったら知ったで苦しんで、それでもなおもっと知りたくなるんだからなぁ・・・ 今日のところはこれぐらいにしといてやるぜ。」

　このままでもいいが・・・ 禍月に身体返してやるか。

第８話

僕はテレビをつけていたと思ったらテレビが消えていた。何を言ってるかわからないと思うし、僕も何を言ってるかわからない。一体全体どういう事なのか。

「あれ、由菜。テレビは・・・？」

―ダメ、付けちゃだめ・・・ ―

状況の説明を由菜に求めるも、由菜の声音はあまりにも弱々しくて、僕はテレビなんかよりもそっちのほうが心配でしょうがなくなった。

「由菜、どうしたの、何かあったの・・・？」

―禍月・・・ 禍月は優しいね・・・ ごめん、ちょっと身体借りるよ。―

そう言って由菜は僕の身体を台所へ移動させ、冷蔵庫にあった卵と冷凍保存されていた食パンを取り出していった。

「まずこれをトーストして・・・ フライパンはあるね、目玉焼きを作って・・・ っと。」

由菜に預けた僕の身体は手際よく料理を作っていく。由菜の手料理かぁ・・・ でもこれ僕自身が作ってるから外見は普通に自炊だよなぁ・・・

―出来たよ禍月。―

そんなこんな考えてるうちに完成していた。目玉焼きとトースト。これってもしかして。

「乗せて食べろってことだね。由菜らしいや。」

―どういうことよ・・・ ―

とまぁ、こんな調子で和気あいあいと朝ごはんを食べることにした。でもトーストだからすぐ食べ終わるわけでありまして。

「ごちそうさま、由菜。」

―お粗末さま。ちゃんと食器は洗ってよ？―

「そうする。そしたら昼寝するよ。」

―まだ朝１０時台だよ。掃除とかしたらいいじゃん・・・ とも思ったけど、その必要性はないわね・・・ ―

皿を洗いながら由菜と会話する。
まるでちゃんと一緒に過ごしているかのように。でも由菜は死んでいる。僕の記憶が生み出した『偽物の』由菜だ。今ここにいる香澄由菜は本物そっくりの贋作、模造品、不完全。それゆえに本物よりも、『本物』であ――

ガシャン!!

「あ…」
―なにやってんの禍月、皿洗いながらぼーっとするからそうなるって… しかも右手少し血出てるよ。とりあえず洗って。絆創膏貼るから… ―
紅く染まった右手を見る。目に映るのは間違いなく僕の手だ。今は何も持ってない。流水の感覚だけが手にある。でも、ある映像が視界に重なって見える。その映像はノイズがかっててよく見えないけれど、紅く染まった僕の手には、何かが握られている。それが何かはわからない。でも、それってもしかして…

―禍月!?ねぇちょっと聞いてる!?あーもう、もっかい身体借りるよ!―
由菜に引っ張られるように僕の身体は動いていって切れた右手に絆創膏を貼る。
―いったいどうしたの、禍月… ―
「僕は… ねぇ由菜、僕は… 僕は人の命を…」
「奪ったことがあるのかな… ?」

第9話

―ちょ、どういうこと、禍月・・・ ―

「気付いちまったのかぁ？世の中には知らない方がいい事もあるんだぜ、禍月さんよ。」

―造禍、さん・・・？―

「けっ・・・ 好奇心は墓穴を掘るもんだって、麻薬だって言ってんのによぉ・・・ まぁいい。これは他ならぬ禍月自身が禍月自身でやったことだ。」

―え・・・ どういうことです・・・？―

「へぇ、わかんねぇのか。いや、そういえばお前は香澄由菜であって・・・ 香澄由菜じゃねぇんだったな。なるほどそれなら知らなくても無理はない。禍月が目を背ける為に作った偶像なんだからな・・・」

―・・・・・・ ―

「まぁいい、じゃあ教えてやるよ香澄由菜。もっとも、もう気づいてるかもだけどな・・・ 敢えて聞くが、禍月が殺した人間、そいつは誰だ？」

―・・・ わかりません。―

「けっ・・・ まぁいい。じゃあ答えだ。」

「朽葉禍月は、香澄由菜を殺したんだよ。」

―――――――――――――――

ザーザーと雨が降る音がする。

香澄由菜は朽葉禍月に殺された。

その理由までは教えてはくれなかった。

―どうして・・・ ―

考えても意味はないだろう。そもそも私は香澄由菜であって、香澄由菜ではない。本物はもう死んだんだ。

じゃあ私は、朽葉禍月が生み出した今ここにいる香澄由菜は何故生まれたのだろう。

いつぞや禍月に言った、禍月が壊れる前に元通りにするための造られた人格・・・ だとするなら教えていいものなの？知らないまま、過ごせないの？

雨の音は未だに激しい。

駄目だ。気づいちゃったら、忘れてた辛いことを思い出しちゃったらそれこそ禍月は壊れちゃう。

だったら、私が言わなきゃならない。

私を、香澄由菜を殺したのは・・・ 朽葉禍月自身であると。

「ねぇ、由菜。」

―なに、禍月。―

「僕は、人を殺したことがあるのかな。」

―あるよ。―

「そっか。僕は、もう既に人殺しなんだね。」

―そうだね。―

「しかも僕は、誰より大事で、誰よりも大好きだった由菜を、殺したんだよね。」

―気づいてたの？―

「ううん、本当は覚えてる。でもずっと後悔して悲しくて、なんでそんなことしたんだろうってずっと思ってる。そんな中で記憶がぐちゃぐちゃになっちゃったんだろうね。」

―そっか。―

「怒らないの？」

―怒ってどうにかなるものじゃないよ。もう本物の私は生きていないんだからさ。私は禍月の造った偽物。でも、もう私の必要はないんじゃないかな。―

「・・・ どうして？」

―それは・・・ もう死人に縛られちゃだめだからだよ。お縄について反省して、更生してね。―

「嫌だよ。」
―わがまま言わない。―
「嫌だっ!!」
「僕はまだ、言ってない・・・ 由菜に一番言いたいことを言ってない！」
「僕は・・・ 由菜が好きだっ・・・ ！」
―知ってるよ。私も・・・ 好きだった。―
「そっか。じゃあ、これで最期だね。」

「二人一緒に、添い遂げよう。」

雨はまだ降っている。
雷も鳴り始めている。
香澄由菜の死の真実を知った朽葉禍月が自首することはなかった。
いや、ある意味では自首したとも言える。ある日の新聞の片隅に、男子高校生が首を切って自殺したという記事が載っていた。
それだけのことだ。

第（1）0話

ある冬の日。
香澄由菜と朽葉禍月は2人並んで歩いていた。
「ねぇ禍月。」
「どしたの由菜。」
禍月の進路の前に由菜は躍り出る。
動きに揺れるマフラーと白い息。
風のない中降りてくる白い雪。
「私、そろそろ引っ越す予定だったんだ。」
「え・・・？」
唐突で、妙な言い回しをした宣言だった。
「でもね、私はここから引っ越したくなんてないんだ。どうにかして、引っ越さないように親に言って、それでもどうにもならなかった。」
「それで・・・？」
由菜の話の続きを促す。
何か、変な感じがしたから。
「だから。殺しちゃったの。」
「え・・・？殺しちゃった、って、親を・・・？」
「うん。」
強い風に運ばれた雪がヒュオウヒュオウと音を立て、雪をコートに打ち付ける。
冬の空気とは違う寒さが僕の背筋を走った。
「私、どうすればいいのかな・・・」
頭がこんがらがってる。
何から手をつければいい。
あの優しい由菜がどうして。
考えても答えは出ない。
「由菜、は・・・」
「ん？」
絞り出した問いはこうだ。

「どうして、引っ越したくなかったの？」
「・・・ 優しいね、禍月は。」
「はぐらかさないでよ、優しくもない。必要とあらば警察にも行くけど・・・ でも、それだけは聞きたい。由菜がどうしてそんなことをしたのか。その理由があるんだよね。」
「そうだよ。」

「禍月と離れたくなかったから。」
その時僕は、ああしまったと。僕のせいかと思ってしまった。

「そうなんだ、僕のせいか・・・ 僕がいたから、由菜にそんなことをさせちゃったんだね。」
「え・・・ ？なんでそうなるの・・・ ？」
少し考えればわかる。離れたくないから殺した。離れたくない理由がなければ殺さなかった。単純じゃないか。
「僕はそう思うよ。そしてきっと、同じような状況ならきっと僕も由菜のようなことをすると思う。僕だって、由菜と離れ離れになりたくないから。」
「だとしても・・・ ！禍月のせいじゃない！」
「・・・ 優しいね、由菜は。僕より。」
ゆっくりと由菜に近づく。
「・・・ ！来ないで、禍月・・・ 私は、私は・・・」
自分のやったことに気づいた由菜は震え始めた。僕ができることはなんだろう。
「こないで・・・ っ！」
「っ・・・ !?」
由菜の手には血の跡が残るナイフがあった。
僕の足も止まる。
でも由菜を放ってはおけない。
「持ってたんだね・・・」

「指紋が、あるから・・・ でも・・・ 向けたくないよ・・・ だから来ないで・・・」
「僕は由菜と離れたくないよ。だから。」
止まった足をもう一度進める。
それで刺されたとしても本望だ。
「来ないでって言ってるでしょ・・・」
「ダメだよ由菜・・・ そんなのは捨てないと・・・」
ナイフを持つ由菜の手に僕の手を添える。
「禍月・・・」
由菜の表情が緩む。
僕も微笑む。
でも、次の瞬間。
「もう私は、許されないね。」
ナイフを僕の手に持たせて、自分から由菜は、僕を抱きしめるような動きで、ナイフに刺さりにいった。
「え・・・ ?」
「ごめん、禍月・・・ 生きてね・・・」
これが僕と由菜の最期の会話。

そこで、僕の走馬灯は終わりを迎えた。
この物語は、始まってなんていなかった。ずっと前から終わっていた。ただのエピローグに過ぎなかったんだ。